第728号 平成18年1月20日発行（毎月20日発行）
昭和49年8月31日　第三種郵便物認可

2006年（平成18年）
1月号（No. 728）
社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価1部　150円
URL●http://www.jac.or.jp
e-mail●jac-room@jac.or.jp

目　次

山岳会の新たな100年に向けて…1
マナスル雑感、50年の歳月……2
連続講演会　第5回　松丸秀夫さん「山日記から見えてくる日本山岳会」……4
中央分水嶺踏査……6
山岳地理クラブ／山の自然学研究会／三水会／九五会
支部だより……8
関西／東海／福井
報告……10
図書委員会／事業委員会
東西南北……12
40数年ぶりに履いた鋲山靴／アイルランドを旅して／マウンテン・フェスティバル
図書紹介……14
会務報告……16
ルーム日誌……17
会員異動……17
Climbing & Medicine・52……18
図書受入報告……18
INFORMATION……19

▶日本山岳会事務（含図書室）取扱時間
月・火・木 …… 10～20時
水・金 …… 13～20時
第2、第4土曜日 …… 閉室
第1、第3、第5土曜日 … 10～18時

山岳会の新たな100年に向けて

平山善吉

新年あけましておめでとうございます。

昨年は100周年を無事終え、改めて会員の皆様のご協力に感謝するとともに、次の100年に向かって私の考えを述べてみたい。

社会状勢が目まぐるしく変化するなか、本会も、少子高齢化と若年層の会員離れが進み、会員の平均年齢は64歳と高齢化した。また、退会者、物故者の合計は新入会員数を上回り、会員数は減少している。この現状に対し、03年2月には、「長期改善計画」を、04年6月には、「長期目標検討委員会報告」が示された。

これらは、理事会で報告されたが、次の100年に向かっての方向性を明確に示すには到っていない。これは、本会をとりまく現状の厳しさによるものである。幸い、本会の財政は順調に推移しているが、今後、クラブとして存続するには問題が多く、大きな課題としてこれらを議論する必要がある。

私は、先の報告をもとに、いくつかの具体案を理事会に示し、実行できるものから実行し、今日に到っているが、決め手を欠くのも事実である。そこで、現状として、内部の改革により、若年層の起用、あるいは高齢者の活用によって、会の活性化を図りたいと思う。また、先鋭的な登山の実践により、さらに魅力的な会を目指し、それらの力を結集することによって、現状を乗り切りたいと考えている。

年頭の抱負を語る平山善吉会長

まず、本年度中に実行するものとして、理事会、評議員会の業務分担と定数の是正。委員会、委員の若返り。事務局体制の整備・強化。委員会の統廃合。表彰委員会の設置などがあり、加えて登山と事業として、先鋭的登山の推進と支援。学生部登山への援助。支部との連携の強化と支援などがある。

また来年度中の中期目標として、公益法人改革への対応。サービス部門の法人化。ルームの改装なども考えている。

さらに10年後を目標にした長期展望として、会員減少による収入減への対応。図書室の拡充。新クラブルームの購入などがあるが、更なる検討事項として、クラブとしてのあり方や、首都圏の支部化も考慮する必要があるだろう。

更なる発展のため、各位のご協力を得、英知を集め、楽しく、そして輝かしい山岳会の創造に努力したいと思う。

本年も会員各位のお力添えをお願いしたい。

マナスル雑感、50年の歳月

南井英弘

今年、日本山岳会はマナスル登頂50周年を迎える。そこで日本山岳会は創立100周年記念マナスル登山隊を派遣。50年前のマナスル隊の記録と比較し、所見を報告してもらった。

2005年春、100周年記念マナスル登山隊に参加した。半世紀前、山岳部学生として羨ましく思いながら一喜一憂し、その後も夢にまで描いていたマナスルだった。しかし、夢にまで見た今回のマナスルは、悪天候のため本格的な登山活動すらできず、心残りの下山となってしまった。

当時、見聞した情報や記録などと今回の登山を比べると隔世の感があり、所感を述べてみたい。

ヒマラヤ登山の変化

50年前のヒマラヤ登山は、許可された一部の人達だけのものだった。登山許可取得のために現地まで出向き、ネパール政府とハードな交渉の末に許可書を入手している。当時は、海外渡航そのものが一般人には認められておらず、認められるのは、政府の各省庁から構成された渡航審議会の許可を得た者のみだった。また、旅券も海外渡航許可を受けた者のみが取得できたが、1回きりの一次旅券であり、ビザは事前取得が必要であった。遠征隊の本隊は船でインドに入っている。

海外渡航が自由化された現在とは大きな違いだ。

今回はネパールのエージェントに依頼して入山許可を取得し、飛行機でカトマンズ入りした。渡航費など費用も、国内で自由にUSドルを購入できるし、カトマンズの空港やホテルなどで日本円から現地通貨に交換する事も可能である。ヒマラヤ登山は、今や誰でもできるようになったのである。

運送と移動手段の著しい変化

運送手段に関しても大きな違いを経験した。

50年前は、登山用具や食料などの遠征用隊荷の輸送は、日本から船で運ばれ、汽車とトラックでネパール入りした。だが今回は、装備、食料など多くのものが現地調達可能で、日本からの隊荷はすべてを飛行便に託した。

1956年の第3次マナスル登山隊では、現地での移動に396人のポーターとキャラバンを組んで、17日間を要してサマにたどり着いている。今は大型ヘリコプターをチャーターし、40分弱でTBCに降りたつことができる。荷物と隊員、シェルパを合わせて約4トン強を2回のフライトで運んだ。帰路は1フライトで済ませた。その結果、キャラバン中に疲労を重ねて、体調を崩したりするリスクはなくなったのである。

ヘリコプターでマナスルTBCまで40分弱で到着

現地エージェントとの連携

過去の海外遠征では準備段階が大仕事であった。隊員や関係者は、登山許可の取得から、食料・装備の買い付け、梱包、出荷と奔走したものだ。今回は大蔵喜福隊長が長年築いた人脈とノウハウで、隊員はほとんど手助けすることもなく準備を終えた。裏を返せば、準備に時間を避けない多忙な人も参加できるようになったのである。

ネパールでは現地エージェントが非常に機能的に活動している。登山許可の申請から現地のトランスポーテーションの手配、テントや酸素ボンベ、マスクを含めた装備、食料と燃料の調達、同行のシェルパ選び、登山隊からの連絡本部的役割など、ほとんどの仕事を手際よく処理し、信頼できるものであった。過去には多くの隊がポーター問題で苦労しているが、今

回はすべて現地エージェント派遣のサーダーが責任を持って交渉し、彼らを雇用した。当時、隊員が苦労したポーターへの日当の支払いもサーダーの責任で実施した。

登山……隔世の感

登山現場では50年ひと昔の感がより強かった。

なかでも通信に関しては、革命的な変化があった。大蔵隊長と河野隊員が、それぞれパソコンをBCまで担ぎ上げた。ソーラー発電用パネルとバッテリーを用いて、パソコンを立ち上げた。そして衛星電話を使用し、JAC本部や在京の関係者、カトマンズのエージェントなどと気軽に連絡を交わしていた。毎日行なわれたマナスル・レポート交信、緊急時のヘリコプター手配など、都会にいるのと同じ感覚で行なわれた。

情報から隔絶された静かな山奥のヒマラヤで、家族や恋人の手紙を首を長くして待った初登頂当時から見ると、考えられない世界に変身したといえる。「マナスル初登頂成功」の伝令を持って走ったメールランナーなる言葉は、すでに死語と化していた。

50年前の初登頂は5月9日、新聞各紙で報道されたのは5月18日の朝刊だった。キャンプ間の連絡にはトランシーバが使われた。今回のBCでは、電源としてソーラー電池を利用した。軽量化と効率向上でソーラーシステムの使用は今後ますます増えるだろう。

装備は軽量と共に強度も増し、耐水性などにも配慮されたウエアを使用した。革靴や帆布製のキスリングは完全に姿を消して、プラスチック・ブーツや軽い縦型のザックが主流である。カメラはフィルムからデジタルに変わり、軽量化とともに現場の情報を即時伝送するのに極めて有効であった。ヘッドランプも電球がLEDに変わり、軽量化の上に長寿命となった。

半世紀前にはニューデリーからマナスル地方の天気予報を毎日ラジオで放送してもらったものだが、今や「アドベンチャー・ウエザー・ドット・コム」に依頼して、毎日、ニューヨークからエヴェレストおよびアンナプルナ周辺の1週間分の気象予報データを、ベースキャンプまで送信してもらえる。それも無料で、大変心強く思えたものである。ソーラー電池の充電が十分な限り、メステントには電灯が灯った。不足時にはプロパンガス灯が使われた。当時のローソクとは雲泥の差がある。

位置の確定のためには磁石とGPSを使用した。正確な地図がある限りGPSは信頼できるが、マナスル周辺の正確な地図はない。河野隊員が伝送したデータを基に、JAC本部の宮崎紘一氏が日本で地図上に入力したものを、翌日にはBCで確認することができた。

サマ集落の様子

サマでは、半世紀前に集落民の要求に対し、毅然とした態度で現地人達と交渉に当たったスッパ（ネパール政府に直属し、数十村を掌握する郡長格の役人）のような存在を、今回感じる事は無かった。それに引き換え、マオイストの恐怖が、ネパール全土に広がりつつある。マナスル登山の際、ブリガンダキ経由、徒歩で入山した外国隊は、マオイストから丁寧に歓迎の言葉を受けながら、中央政府に支払ったと同額の入域料を要求され、やむを得ずに支払っている。

サマ集落では、街道に電柱が立ち、学校や寺院では昼間から裸電球が灯っていた。お米がなくなり困った彼らが、カトマンズで買い付けた大量の米を、我々を迎えに来る空荷のヘリコプターで運んでほしいと依頼してきて、隊長が了解するという一幕もあった。ドイツ、スペインの2隊と日本隊がプレ・モンスーン期に入ったので、現地住人たちは潤ったようだ。

ブリガンダキ沿いに数日かけて荷を運ぶため物価は割高になり、灯油もないようだった。チベットへ抜けるキャラバンも見かけず、外国人トレッカーも1人見ただけであった。

政府からの支援もほとんどないまま、サマの村人はこの半世紀をブリガンダキにへばりついて、ひっそりと生きているようであった。

サマ集落の簡易水道

連続講演会「語り継ぐ黎明期の登山……それぞれの山」

第5回　松丸秀夫さん
「山日記から見えてくる日本山岳会」

資料映像委員会

資料映像委員会では05年11月3日、東京体育館において講演会を行なった（参加者120名）。

講演は、松丸さんがこの日のために作成した資料をスライドで映写、ゲストスピーカーや、山の歌の合唱を交えながら進められた。

以下に、講演会記録をもとに編集した概略を報告する。

創刊号にみるアルピニズム

『山日記』が誕生したのは、1930（昭和5）年、日本山岳会創立から25年後である。発刊の目的は、「登山者の便宜に資するために常時携帯するよき伴侶たるべく作られた」とされている。『山日記』は日本山岳会について触れることは少ないが、50輯を通覧すると、会の歴史が透けて見えてくる。

創刊号の見開きには、山部赤人の万葉集の長歌「不盡山」を引用している。「天地の　分かれし時ゆ　神さびて　高く貴き　駿河なる　布士の高嶺を……」と謳う日本のロマンチシズムの上に、西洋の新文明である登山を導入しようとする日本山岳会のアルピニズムを示している。

『山日記』第1号
（1930年創刊）

『山日記』の構成

登山者に必要な事がらを書いた読みもの、登山の注意、日記欄、および調査記事から成り、それを常時携帯できるようなポケットサイズに凝縮した。

読みものの冒頭には「山に登る人々のために」が毎号載った。読んでいて、登山に対するウキウキした気持ちが沸きあがってくる、そんなロマンチシズムがあった。

登山の注意は、登山の精神的バックボーンであり、編纂の主力が置かれた。

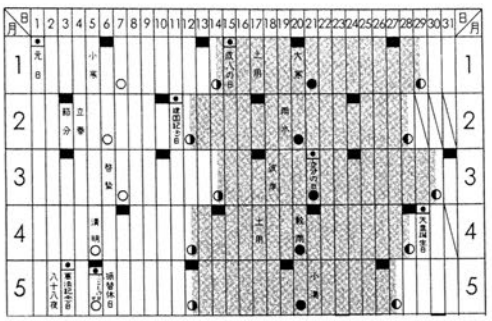
なぜ日記欄を設定したかと考えると、そこには日本山岳会創立の趣旨が見えてくる。それまでは、登山に際して便宜を与えるような出版物は無かったといえる。個人で研修・努力して、その成果を持ち寄ることが、全体の進歩につながり、しいては日本のアルピニズムを勃興させていくというもの。そのためには日記をつけ、それを通覧するというのは有益である、という考えからであろう。

多くの人の手を要した調査と確認

『山日記』は調査事項が多くを占めた。現在とは異なり、通信のインフラが整備されていなかったので、電話で調べることは極めて困難であり、実際に歩いて調査をしなければならなかった。そのため、多くの人の手を要した。

実用記事の場合は、調査した内容をさらに確認することも必要だった。わざわざ地方に行き、支部の方々の話と突き合わせたり、愛読者カードを提出してくれた人に裏づけをとる、などの作業を行なった。そして、これらを調べる時には、「シンネンスイスイ」という符丁を用いた。「シン」は寝具あり、「ネン」は燃料あり、「スイスイ」は初めの「スイ」は飲料水がある、後ろの「スイ」は自炊が可能という意味である。この符丁で、編集の担当者はずいぶん汗をかいた。

行程表は、初めのうちは文章で書いていたが、図に変更した。これもまたエネルギーの要るたいへんな仕事であった。


森下博三さんがタイガー計算機を回して作成した暦の一部

『山日記』はそのカバーの色から「赤い表紙の山日記」と呼称されたが、中身もきれいでなければなら

ない、と松方三郎さんから意見があった。それで、コロナ天文台の森下博三さんが腕を奮い、新しいスタイルの暦や便覧を作って載せた。タイガー計算機を手で回して計算したのである。日の出、日の入りの時間には、高さによる補正もある立派なものだ。

『山日記』について講演する松丸秀夫さん

戦争を乗り越え、復刊

『山日記』は時代背景と大きく関わってきた。そのひとつに戦争がある。『山日記』誕生の1930年代の後半は戦時体制で、言論統制があり、軍の方針に従わないと本は出せない、紙の配給はない、などの試練を受けた。

そして時代は、満州事変から太平洋戦争へと突き進んだ。

1945（昭和20）年、敗戦により日本は廃墟と化す。『山日記』は1944（昭和19）年から47（昭和22）年まで発行できず休刊した。再刊の検討が行なわれるものの、非常に難しかった。世の中が、今後どのようになるか解らないのである。それでも48（昭和23）年に復刊した。その時の苦しみを編集代表の谷口現吉さんは、復刊1号の前書きに縷々述べている。

厳しい言論統制化の時代『山日記』は、「はしがき」1ページだけの翼賛的な文言を書いただけで乗り切った。並々ならぬ努力と幸運があったのだろう。

ヒマラヤ黄金時代と『山日記』

戦後、日本は復興し、アルピニズムも花開いた。「山に登る人々のために」は、松方三郎さんが毎号健筆を奮い、30ページの長文になることもあった。「山の歌」が『山日記』に何度も載り、ロマンチシズムが復興の時代にマッチした。

厳しい幾多の物語を持つエヴェレストはいつ登られるのか、と期待をされる黄金時代を迎える。

『山日記』にも、外国の高峰やそれにまつわる書物の記事が増え、「外国高山120座」は何輯にもわたり継続された。

そして、1953（昭和28）年にエヴェレストが登られ、56（昭和31）年に日本山岳会隊がマナスル（8125メートル）に登頂した。

失われたアルピニズム

松方さんの書く「山に登る人々のために」はページが薄くなり、1955（昭和30）年にはなくなった。翌56年に復活したが2ページに減り、それまでとは違って登山を極めてわかりやすく解説し、アルピニズムを説く姿勢からは脱却した。

1967（昭和42）年には松方さんの記事はなく、山崎安治さんが「登山の基礎」を書いている。技術のみを論じる苦心が忍ばれ、文中にアルピニズムは言及されなくなった。

1968（昭和43）年には山崎さんに代わり、加藤泰安さんが「山登りの唯一の原則」として「山でアドベンチャーをすること」と書いてはいるものの、アドベンチャーに駆りたてる原動力には触れていない。

結局、この時代、日本山岳会はアルピニズムを失った。

時代はモダニズムと大衆化へ

8000メートル峰が次々に登られ、ヒマラヤは鉄の時代を迎えた。

時代は大衆化に向かっていくとの認識はあったが、『山日記』や日本山岳会はいかに対処すべきかわからないことばかりであった。

独立採算の事業であった『山日記』は、戦後復刊してから順調に販売部数を伸ばし、最高は4万部にも達した。しかし、それをピークにして減少に向かった。

そして『山日記』は1985（昭和60）年版（第50輯）で終わった。

百名山ブーム、山頂の山小屋でビーフステーキを供する時代、数百万円で8000メートル峰に連れて行ってもらえる時代、世の中のシステムは変わった。モダニズムの時代と言えよう。

若者に期待するばかりではなく、レベルアップ可能な中高年が努力して、新しいアルピニズムをうち立てることを望んでやまない。

（文＝奈良千佐子）

松丸秀夫　1915年生まれ、東京帝国大学医学部薬学科卒。在学中はスキー山岳部に所属。1955年～74年まで『山日記』編纂に携わる。

燧ヶ岳と氷に覆われた尾瀬沼

の違いで如何に環境が激変するものかを実感した。また、稀に見る好天と絶好の残雪状態に恵まれたことに感謝する。　（関　清）

三水会

熊と遭遇、雷と雹に追われて

三水会は長野県南佐久と群馬県西上州が接する内山峠と十石峠間を分担した。水平距離にして約27kmだが、荒船山を挟んだ内山峠から田口峠までの9.5kmを除いて登山道はない。３回の踏査行で登山道のない約18kmの区間を踏査し、第４回で全区間を完了した。

第１回は2004年11月21〜22日。初日は田口峠と余地峠間を３名ずつの２班で両峠から開始した。田口峠班は霊仙峰、小唐沢山と順調に進んだが、その先から猛烈な熊笹漕ぎとなった。13時を過ぎた頃、前方60m程の場所に３頭の熊を目撃した。うち２頭は小熊のようであったが、急いで藪のなかに消えたのでホッとした。余地峠班は1337.4m峰からの下りで尾根を誤ったためだいぶ時間をロスしてしまい、時間切れとなって余地峠に戻った。翌22日、４名のパーティで大上峠から1308m峰、広小屋山の肩を経て３時間程で矢沢峠に着いたが、この日はここで分水嶺を離れ、峠より急な涸れ沢を下って大上林道に出た。

第２回は2005年５月14日。７名で前年やり残した区間を終え、翌日は十石峠から北上して途中の猛烈な笹藪のなかを、GPSを頼りに雷と雹に遭遇しながら７km余を11時間の苦闘ののち大上峠に抜けた。

第３回は５月29日。４名で余地峠、矢沢峠間を日帰りで踏査し、懸念されていた区間を完結した。

最終の第４回は10月１日。10名で内山峠からほぼ分水嶺上を通っている登山道をたどって荒船山、星尾峠、御岳を経て田口峠に抜け、これをもって三水会分担の全行程を完了した。　（塩澤 厚）

九五会

浅間山噴煙を眺めながら

九五会は2004年10月２日、浅間山火山ルート地点から鼻曲峠を経て碓井峠までを、A、B２班に分け南北から踏査した。A班10名は浅間白根火山ルートの最高地点を９時に出発した。国道146号県境までの500mは藪の中、ここから約５kmは道路上を、浅間山を背に歩き続け国境平へ着いた。休息後、登山道から外れ權木に覆われた暗く滑りやすい急斜面を一気に登り、1383mの三角点を確認した。鼻曲山への稜線上はミズナラの權木帯で、長野、群馬の両県側にはカラマツの植林が多い。林床には赤い小さな実をつけたチョウセンゴミシが、あちこちに見られた。13時30分、見晴らしのよい小天狗に到着した。鼻曲山頂で休息の後、鼻曲峠に向かった。ここがB班（碓氷峠〜鼻曲峠）との合流地点であると共に踏査終着点となるためGPSで位置測定し、霧積温泉へ16時到着した。

B班７名は、タクシーとのトラブルがあり、国道18号線沿い碓氷峠E510地点からの出発が少し遅れた。左手に登山道入り口があったが、分水嶺筋と思われる所から数10ｍ藪漕ぎし木洩れ日が射す林に入った。1064の標識があり、しばらく歩くと登山道に出た。ここから見晴台までの４kmはほぼ登山道に沿って、ミズナラや栗林の中を歩いた。熊野神社で休憩し、鼻曲峠（霧積峠）に向かった。一の字山、留夫山を越えるアップダウンが激しい道程で１時間30分ほど遅れ、A班とは合流できなかった。

霧積温泉で体を休め、夜は総勢19名の懇親会で大いに盛り上がった。足腰の痛みは残るも、何かホットするとともに、心地よい達成感があった。　（手島一郎）

鼻曲山での記念撮影

中央分水嶺踏査

踏査率：86.1%（2005.12.25現在）
（山行報告未提出分を含めた実質的踏査率は91.3%です）
延べ789日、3894人参加

山岳地理クラブ

線の分水嶺で終わらず

山岳地理クラブの分水嶺は、福島県の甲子峠から、男鹿岳北方の大川峠までを担当した。この野岩国境の多くは、もちろん踏み跡がなく、藪が続くのであるが、年齢、経験を問わず全員でヘルメットを被り猛然と突入、団結力で踏査した。

さて、このルートは登山関係はもちろんのこと、地元の人ですら知る人が少ない。その大萱峠という峠の存在を、平野彰会員が所蔵していた『岩代国若松縣第一大区全図』内から、それは戊辰戦争の時の水戸藩諸生隊の退路、明治時代初期には年に2500頭もの馬が越え、若松縣令が部下50名と越えた峠であることが判明した。

この調査過程において栃木県山岳踏査の第一人者である中村宏氏、水戸藩諸生隊の研究をされている茨城大学山下恒夫教授、地元南稜会の渡部衛氏、林野庁関東森林管理局、奥会津地方歴史民俗資料館の渡部陣一氏、山麓の栗生沢集落の方々に情報収集等でお世話になった。湯田芳博田島町長とも意見交換し、文化交流等で今後前向きに行動することになった。

我々の分水嶺は日本山岳会100周年記念事業の線の踏査だけで終わらず、そこから発生した地元との交流を大切に、面での踏査を継続していく予定である。

（遠山元信）

猛烈な藪帯をこいた後の記念撮影（大川峠にて）

山の自然学研究会

夏が来れば思い出す……

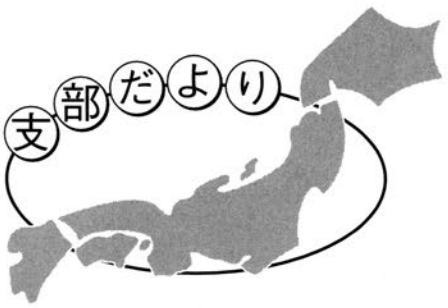
山の自然学研究会の担当区は首都圏１の中の、西に至仏山（2228.1m）、北に燧ヶ岳（2356m）が望める「三平峠〜富士見峠〜鳩待峠」、標高2000m前後で、冬季は雪に閉ざされているルートである。

「夏が来れば思い出す」の歌詞ではないが2004年４月末、さっそく冬眠中の尾瀬に向かって予備調査（２名）に出かけたが、ルートはすべて白銀の世界。夏道と分水嶺の位置関係が十分解明できなかった。

雪が消えて６月、再度調査（５名）に入り、三平峠から大清水平、皿伏山までの登山道樹木に赤テープのマーキングをしてきた。９月はさらに全ルートの登山道の必要箇所に樹木マーキングと、中原山（1968.8m）および皿伏山（1916.8m）の三角点を確認して、積雪期踏査の準備（４名）を行なった。

年を越して2005年５月23日、三平峠から大清水平、皿伏山まで積雪平均１mの分水嶺を踏査（３名）した。その前後は雨天であったにもかかわらず、当日だけは快晴であった。大清水平から尾瀬沼畔に出て見ると、沼は流氷が押し寄せたように凍っており、その向こうに雪に覆われた見事な燧ヶ岳を望むことができた。

驚いたことに、翌朝は沼の氷が解け去って静かな水面となっており、沼畔には５cmほどの可愛いミズバショウの花があちこちに現われていた。この時期は１日



全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとリポートします。

関西支部

ブロック式典開催

05年11月5～6日、日本山岳会創立100周年・関西支部設立70周年記念式典を開催した。式典は講演会・式典・懇親会の3部で構成、首都圏や全国13の支部から総勢140名が参加、盛大な式典となった。そのうち講演会と式典は、高野山大学会議室で行なわれた。

第1部の講演会は「日本の登山文化の原点を探る」というテーマのもと、まず、高野山大学奥山直司教授に「河口慧海の道を追う」と題して、話をしていただいた。昨年見つかった慧海の明治33年3月10日から12月31日までのヒマラヤの旅の中で綴った日記に沿って、慧海が越えた峠の解明についての報告は興味深いものであった。

揚柳山での記念撮影

続いて、吉野山金峯山寺の田中利典執行長が「役行者と修験道」と題して、山岳宗教の祖、役行者の生涯と修験道について講演した。「装備や同行人に頼りがちな登山風潮」が跋扈する現在、改めて「自然とのつき合い方」を再認識させられる話であった。

第2部の式典では、平山善吉会長と田中文男日本山岳協会会長から祝辞をいただいた。また、阿部和行前支部長に「関西支部の70年の歩み」を話してもらった。そして、70年の歴史の中で39年にわたり支部蔵書4300余冊の保管をしてもらっている、今西組の今西邦夫社長に、重廣恒夫支部長より感謝状が手渡された。

第3部の懇親会は、本部の藤本慶光評議員の実家である遍照光院に場所を移し、平林克敏100周年記念事業委員長の挨拶のあと、首都圏と支部からの参加者を紹介し、支部参加者を代表して秦野一彦北九州支部長に祝辞をいただいた。その後、田邊壽副会長の乾杯の音頭で待ちに待った祝宴が開始され、大いに盛り上がった。斎藤惇生元会長の中締めでお開きとなったが、さらに場所を変えて2次会、3次会と宴は続いた。

翌日の山行は、壇上伽藍から九度山に至る21キロの町石道と、金剛三昧院から高野三山を巡る女人道を歩いた。あいにくの天候ではあったが、多数の方に参加をしていただいた。名物の紅葉もちょうど見ごろで、高野山の秋を堪能していただけたものと思う。

最後に、奥深い高野山まで足をはこんでいただいた参加者の方々と、協力いただいた支部会員にお礼申し上げます。　**（金井良碩）**

東海支部

ブロック式典開催

日本山岳会創立100周年記念式典と、御在所岳集中登山を、05年10月29～30日に開催。

29日の記念式典は、今池ガスビル大ホールにて、来賓、支部員、支部会友200名以上の参加者を得て行なわれた。

開会にさきがけ寺西申生支部長から、100周年記念式典において、東海支部が特別表彰を受けたことが報告され、表彰状が披露された。

さらに、「記念式典に参加し、改めて私達は諸先輩の方々が築かれた偉大な山岳会に所属していることを大変誇りに感じた。その式典の中で、わが東海支部は、海外登山を実践し活発な支部活動を展開したということで特別表彰を受けることができた。表彰状は支部の宝としてルームに飾らせていただく」と挨拶があり、会場は大きな喜びにつつまれた。

続いて和田豊司副支部長が、順風満帆に過ぎてきた日本山岳会の100年間に対し、これから迎え

る100年を模索した。その中で会員の高齢化、若い人の入会減などの問題が山積みであることを示唆し、「50歳を超えた隊員で行なった8回のインドヒマラヤ登山隊、森づくりを楽しんでいる猿投の森づくりの会、これも新しい山岳会のあり方ではないだろうか。もちろん、海外登山の東海支部は、これからも世界の山に出かける」と挨拶した。

続いて、平山善吉会長、伊藤衆議院議員、中日新聞の小出常務からそれぞれ祝辞をいただいた。

引き続き、日本山岳会創立100周年記念行事報告を、和田副支部長が映像を駆使して行なった。

アトラクションでアルプホルンを演奏する大桑村の皆さん

その中には、権兵衛峠から野麦峠までの77キロ間の中央分水嶺踏査報告をはじめ、100山ラリー、冬季ローツェ南壁登山隊、インドヒマラヤ登山隊、台湾の玉山、雪山登山計画など、東海支部独自の活動の報告もあった。

その後、「目で見る日本山岳会の100年（資料映像委員会編纂）」の貴重な映像スライドが放映された。羽田栄治資料映像委員長の解説を受けながら、100年を振り返った。

式典終了後、アトラクションとして「Mountain Music Fair」のプログラムを鑑賞した。これは、山岳会が活躍の場を持ったアルプス、ヒマラヤ、アンデスの民俗音楽で、約1時間、出席者は演奏と一体となって楽しんだ。

7階ではフリーマーケットが開催された。横田実行委員長の軽妙な司会により、高額商品を中心にオークションが行なわれ、大いに盛り上がった。

その後、9階ホールで立食による懇親会が、出演者も参加して、全員で和やかに開催された。

（佐野忠則）

福井支部
チベット未踏峰　ジャナリズ峰（6214メートル）登山

福井支部では、日本山岳会100周年記念事業の一環として、05年9月3日から18日にジャナリズ峰登山を行なった。

高齢の会員が多いこともあり、海外登山の対象とする山を検討した。結果、中国・チベット自治区にあるニンチンタンラ山脈の未踏峰ジャナリズ峰に決定した。前年のチュンガチン峰登頂の際に遠望、別の氷河から登れることを確信していたからだ。支部会員に諮り決定し、8名が参加した。岐阜支部の木下喜代男、関西支部の上中俊治両氏も参加、実行した。

ジャナリズ峰山頂にて

9月11日に宮本、木下、川口、田路、大和が予定通り登頂。翌12日には松原も登頂した。しかし登頂を果たした9月12日、BCに戻ると、通訳の色珍から上中氏の訃報を聞かされ、愕然とした。心筋梗塞とのことであった。04年は6000メートルまで登ったのにと思うと、残念でならない。隊長の伊東さんと山縣さんが、ラサで対応しているとのこと。

13日、ラサ市に戻り、ホテルに19時30分に着いた。

14日、上中さんの家族がホテルに到着し、ラサ病院に向かった。我々はテントや他の装備を乾燥させ、整理して格納した。

15日、伊東さんと上中さんの家族と共にラサ病院に行き、遺体を火葬場に運び、荼毘にふした。

そして我々は、16時50分、ラサ空港離陸。18時35分、成都空港に着いた。伊東さんと上中さんの家族はラサに残った。全員が揃ったのは17日で、翌18日には全員が帰国した。

（宮本数男）

報告

1月

Report

日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です

図書委員会

第15回「山を語る・霧ケ峰」

05年11月17日、霧ヶ峰ヒュッテ・ジャヴェルのご主人の高橋保夫氏を講師に迎えて行なわれた。山岳会集会室は満席、席を埋めた30人の顔ぶれは、霧ヶ峰の素晴らしさに取り憑かれた人、久しぶりに高橋さんにお目にかかりたい人、大好きな霧ヶ峰の話を聞きたくて来た人……など多彩。

会員外ではドイツワインの会の古い友人2人も一隅に。高橋さんの趣味や活動領域が見える。

平井吉夫図書委員長の司会で開会。筆者が高橋さんの経歴、人柄を紹介する。

まずは講師自身が多年にわたり撮りためてきたスライド50枚で、霧ヶ峰の四季を映写する。

十分承知の常連も、まだ霧ヶ峰を想像するだけの人も、ため息をつくようにじっと見つめる。

集会室が明るくなり、高橋さんが、まずどういう経過で霧ヶ峰に魅かれていったかを話したいと、独特の口調で語り始める。

東京に生まれ、八ヶ岳山麓で育った。小学校から高校までの信州・富士見の生活が、後の霧ヶ峰暮らしを選択させる心身を養う。

小学時代、父・達郎が近くの入笠山に山小屋を建てた。日曜日によく父の後について静かな山に登る。

岡谷の高校では、山の好きな先生の指導で初めて白馬岳に出かけた。

翌年、級友だけで上高地、涸沢にテントを張った。緑の美しさに感銘を受ける。山に魅かれるきっかけだ。今でも、このときの山の色を覚えているという。

霧ケ峰の魅力を語る高橋保夫さん

大学を卒業して、沢渡のヒュッテ・ジャヴェルに戻り父を助ける。以来、霧ヶ峰の生活。43年暮らしてみて、霧ヶ峰ほど歴史的に「人間が関わった山」は他にないと思う。

まず、縄文の太古の霧ヶ峰は、和田峠の黒曜石の交易路だった。下って鎌倉時代では、武士の祭りとしての流鏑馬などが行なわれ、御射山の観覧席が今も鮮明に残る。

太古から草刈り場だった霧ヶ峰は、毎年山が焼かれ、草原が維持されてきたが、昭和のはじめ、この草原がスキーに適していると評価されて、スキー場が誕生。大勢の都会人がやって来た。霧ヶ峰の素晴らしさに触れ、その名は一気に全国に広まった。

霧ヶ峰の自然に憧れて、当時の著名文化人が、強清水に参集して「霧ヶ峰山の会」を開催したのもその頃。今の観光の意味とは異なる、山の文化を探る催しだった。

戦後の大変化は昭和44年のビーナスラインの開通だ。美ヶ原から和田峠を越えて車山へ抜ける山道は今も健在だが、歩く人は年に何人かに減少。登山者の山から、観光客の山へと一変。車と共にキスゲやレンゲツツジが登場した。

人は時代の目的によって、霧ヶ峰と付き合ってきた。霧ヶ峰の魅力は遺跡、樹叢、湿原、草原だが、いずれも人間との関係が深い。

8時をまわって話が終わり、ビールも出た。永遠の課題「自然と人間」を刻んだ霧ヶ峰を想い、和やかな懇談が始まった。**（川合　周）**

事業委員会

晩秋の熊野古道を歩く

05年11月20～23日、世界遺産に登録された熊野古道を歩いた。

古道は、そもそも熊野三山（本宮、那智、速玉）を参拝するため

の平安時代からの参道であり、なかでも、京都から300キロ西海岸沿いに南下して、紀伊田辺から本宮を目指し、本宮、速玉、那智神社と回り、再び本宮に戻り、大日越で京に帰る中辺路コースは有名である。今回はその中の、那智、本宮間の大雲取り、小雲取り越えと、大日峠を越え日本最古の温泉といわれる湯の峰温泉に至るという行程。

参拝というと江戸時代の伊勢参り、森の石松の金毘羅代参り、関東では大山参りしか知らず、どれも信仰に便乗したリクリエーションのようなものだと思っていた。しかし、熊野古道を歩き、これらの先入観を大いに改めさせられ、認識を新たにした。

発心門王子社の前での集合写真

20日、紀伊勝浦に集合。那智大社の手前の大門坂から歩いて、今に残る古道の雰囲気を味わった。那智大社で2礼2拍手1礼、古道めぐりの無事を祈願する。

21日、いよいよ大雲取り越えへと出発。往時は「蟻の熊野詣」といわれ、途切れることなく参拝者の行列が続いたそうだが、この日は我々のグループと、5〜6名のパーティのみである。那智大社は、樹齢何百年も経った杉の大木に囲まれていた。山中には、日本全国どこにでも見られる杉の人工林が目立つ。南紀は南方熊楠の世界というイメージがあり、照葉樹林帯が見事だろうと思っていたので、この点は期待はずれであったが、茶屋跡や王子社跡、苔むした石畳などで古道を楽しむことができた。

22日、長い行程だがきつい登りはないので気楽に出発する。数日の晴天続きで、放射冷却が強くなり霜が降りたため、日陰のリンドウは花を閉じたままだった。

古道とはいえ、今もなお生活道路として利用されており、突然舗装道路に出たり、国道沿いに歩く所があったり、一般道を横切ったりもした。この事実が、千年の歴史ある古道の価値を下げるどころか、むしろ現代の生活のすぐ近くに残されている事を実感させ、世界遺産として認められた由縁ではないだろうか……。

最後の大日越えではひと汗かき、湯の峰温泉に到着。

最終日の23日、語り部の案内を受け、道々の風景に心を癒されながら、本宮まで3時間の散策である。語り部の話から、当時は難行苦行が多ければ多いほどご利益も多いという事で、道程も厳しく長いものだと知った。

この4日間は晴天に恵まれ、熊野古道を短期間で知ることのできる充実したものであった。

（大貫俊彦）

短歌

熊野古道にて　　高橋文雄

はるけくも　雲取越えて　真熊野の　ゆかし鈴の音　つるりんどう

日本山岳会創立百周年記念出版

日本全国四〇〇〇山の情報を網羅！

◎JAC会員特別割引期間締切せまる！

好評発売中!!

新日本山岳誌

日本山岳会・責任編集

菊判（1992頁）上製／クロス装／カバー掛け／函入り　定価18,900円（税込）

択捉・国後など北方四島の山から、南西諸島の山々まで、日本全国の山に登った、撮った、調べた、そして書いた。日本山岳会の全国25支部約500名が総力をあげて編集執筆にあたった最新・最大の山岳百科がついに完成！

△ 推薦のことば △

日本山岳会二代会長高頭式氏による『日本山嶽志』から百年、山岳の現況を記述し後世に残すべく、百周年記念事業として本書ができました。

日本山岳会会長　平山 善吉

ナカニシヤ出版

〒606-8161　京都市左京区一乗寺木ノ本町15番地

Tel.075−723−0111　Fax.075−723−0095

URL　http://www.nakanishiya.co.jp/

東西南北

オオヒラウスユキソウ

イラスト・倉岡啓吉

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度でお願いします）

40数年ぶりに履いた鋲山靴

笠井　篤

ニュージーランド南島の西海岸には、マウント・クックからの二筋の氷河末端が海岸近くまで迫っている。フランツ・ヨーゼフ氷河とフォックス氷河である。5年前に初めてフォックス氷河に行った。ニュージーランドでは、氷河に入る時はガイドと一緒でなければならない、と法律で定められている。

1月の始め、フォックス氷河の案内所で半日コースの氷河ウォーキングに申し込んだ。一応山登りの服装で山靴を履いていた。しかし、靴を履き替えるようにと差し出された靴は、トリコニーNo.7をベタ打ちした鋲山靴であった。ずっしりと重さが伝わるその靴に、40数年前に初めて履いた鋲山靴の感触が蘇ってきた。

昭和30年代の初め、大学山岳部はアルピニズムを目指した山行が盛んであった。私もその一員であった。秋葉原で買った進駐軍の軍靴から山靴に履き替えた。それが鋲山靴であった。当時の山靴はトリコニーとクリンカーと呼ばれた鉄釘（鋲）を靴の裏に打ち込み、滑り止めにした靴であった。岩登り用と縦走用とで用途が分かれていた。奥又白や涸沢から上高地へ薄暗くなった帰路を急ぐなか、前を歩く仲間の鋲山靴が岩を噛むごとに火花が散り、黙々と歩く40数年前の山行の数々が、昨日のように思い出された。

鶴嘴でステップを切るガイド（靴の縁に鋲トリコニーNo.7が見える）

昭和30年代半ば以降、鋲山靴はヨーロッパから入ってきたゴム底山靴にとって替わり、急速に姿を消していった。私も鋲山靴からゴム底山靴に変え、乾いた岩でのゴム底の安定感に岩登りを謳歌した。そして、鋲山靴は物置の片隅に追いやられていった。

それ以来、40数年ぶりの鋲山靴との出合いであった。フォックス氷河へガイドと共に6人のパーティで入った。氷河は青氷である。ピッケルでは足場は切れない、撥ね返されるだけ。ガイドは土木用の鶴嘴で足場を切って先頭を行く。鋲山靴はしっかり青氷を捉まえ不安は全くない。鋲山靴の威力と氷河を歩く人たちに鋲山靴を履かせているガイド組合の見識に改めて脱帽した。そのことをガイドに言うと、この鋲山靴で氷河での事故は1件もないと、誇らしげに語ってくれた。

その後、フランツ・ヨーゼフ氷河へ行ったときは鋲山靴ではなく、トリコニーNo.7で縁取りしたアイゼンが用意されており、靴のサイズに合わせてそのアイゼンを履いた。トリコニーNo.7のアイゼンは青氷を噛み、斜面でも全く不安はなかった。

今、日本では、鋲山靴は山岳博物館か資料館でしか見ることができない時代の遺物となっている。

ATLAS TREK
個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをこころがけています。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。
株式会社 アトラストレック
（国土交通大臣登録旅行業1167号）
東京／〒160-0008 東京都新宿区三栄町25 三栄ハウス202 TEL 03-3341-0030
大阪／〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋／〒464-0807 名古屋区千種区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422

アイルランドを旅して

古市　進

仲間10人でアイルランドの旅をした。出発前にそのことを話すと一様に「アイルランドに山はあるの」と聞き返された。発端は04年のイギリスの旅であった。仲間とスコットランド、イングランド、ウェールズの各最高峰に登った。その時のドライバー兼ガイドが、アイルランド人だったことから、同じガイドでアイルランドにも行こうかとなったのだ。

期間は05年9月2日から12日間。ダブリン空港を基点に、ウィックロー、ウォーターフォード、ティペラリー、ケリー、ゴールウェイ、メイヨーの各県を時計回りに訪れ、その間に3つの山に登った。

9月3日、ウィックロー山群の主峰ラグナキラ（925メートル）に取り付いた。残念ながらこの日は天候に恵まれず、頂上を目前にして引き返したが、山容の特徴としては低山にもかかわらずU字谷が発達し、氷河湖らしいものにも出合った。アイルランドの緯度の高さが反映したのでもあろうか。

9月6日には、キラニー国立公園内にある、アイルランドの最高峰カラントゥアール（1040メートル）に登った。この日は珍しく終日の晴天に恵まれ、今回の旅では最高の1日となった。イギリス（大ブリテン島）の山々と比較すると、アイルランドの山のスケールは少し劣るが、イングランドの最高点スコッフェルパイクよりは高い。ここでも山々の中腹はおおむね急崖を連ね、昔の氷河の痕跡を窺わせた。好天のおかげで眺望はすばらしく、連なる山脈の周辺には無数の小さな湖が点在し、その多くは氷河湖のように見受けられた。

翌日からはゴールウェイ県のコネマラ地方へ移動しながら、モハーの断崖やキラリー・フィヨルドの景観を楽しんだ後、9月10日には聖なる山クロッグ・パトリック（764メートル）に登った。山名はアイルランドの守護聖人である聖パトリックに因んだもので、同聖人の立像や簡素ながら立派な礼拝堂もあって、巡礼の山として日本の宗教登山にも共通するものを感じた。

アイルランドはイギリスに隣接し、緯度も同じようで山容、植生共に共通するところは多い。また風景一般の印象は北海道に似ているようでもある。そして、今年独立100周年を迎え、奇しくも日本山岳会と同い年ということにも感慨を催した旅でもあった。

マウンテン・フェスティバル

サッチ　益田

05年10月29日から11月6日にわたり、カナディアン・ロッキーの山岳タウンのバンフで、マウンテン・フェスティバルを開催。

第12回ブック・フェスティバルには、地元・ケンモアの環境作家、カースティン・ヒュー、アメリカのベテランクライマーのアーリン・ブルム、イギリスの山岳ジャーナリスト、作家のジム・ペリンなどが招待され、自著を手に冒険談が交わされた。

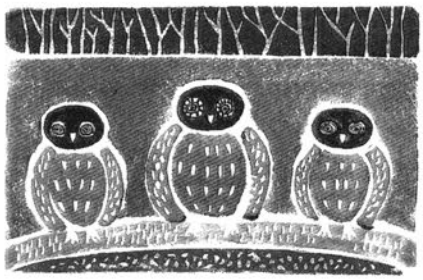
8カ国153冊の参加図書から、最優秀図書賞は、カナダ・ユーコン準州、アラスカを移動するカリブーを6カ月にわたって記録し、環境保護を訴えた「ビーイング・カリブー」が選ばれた。

第30回フィルム・フェスティバルには、イギリスの極地探検家、ラルヌフ・フィネス、地元、カルガリーのベテランクライマー、チク・スコット、スロベニアの若手クライマー、マルコ・プレゼルなどが招待され、「冒険とリスク」をテーマに講演した。

37カ国、317本の参加映画から最優秀賞は、アルプス4000メートル峰、全82座に挑戦する2人のクライマーを記録したフランスの作品「スー・レー・フィル・デス4000」が選ばれた。

南海に聳える4,000メートル峰へ登る
マレーシア最高峰Mt.キナバル登頂
5日間・6日間　東京・大阪・名古屋・福岡発着
●旅行代金：¥142,000〜¥242,000
●出発日：2/25・3/4・3/18・3/25・4/8・4/29・5/3・5/20・5/27・6/10・6/15・6/29
国土交通大臣登録旅行業第490号／㈳日本旅行業協会正会員　ボンド保証会員
アルパインツアーサービス株式会社
〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911
大阪☎06-6444-3033　名古屋☎052-581-3211　福岡☎092-715-1557
e-mail:info@alpine-tour.com　http://www.alpine-tour.com

図書紹介



幸せを呼ぶ鳥　版画・奥野渓石

『登頂八〇〇〇メートル』明治大学山岳部十四座完登の軌跡

谷山宏典・著

2005年8月
山と溪谷社刊
四六判　326㌻
定価2310円

明治大学創立120周年および明治大学体育会山岳部創部80周年を記念して、8000㍍峰14座の完登を目指していた「ドリーム・プロジェクト」は、2003年5月、残されていたアンナプルナI峰を登頂して完成された。著者は、明治大学山岳部のOBとして01年のガッシャブルムI・II峰登山隊に参加し、両峰の登頂者にもなっている。

本書の内容は「ヒマラヤ山脈全図」に続いて、70年エヴェレスト（33年の夢の始まり）、82年ダウラギリI峰（自分たちだけでつかんだ頂）、83年ナンガ・パルバット（魔の山の頂上への執念）、84年カンチェンジュンガ（大遠征隊の光と影）、85年チョー・オユー（止まぬヒマラヤへの想い）、ブロード・ピーク（ヒマラヤに未知の喜びを求めて）、88年シシャパンマ／チョー・オユー（8000㍍に学ぶ）、95年マカルー（悪絶な稜線の苦闘で得たもの）、96年K2（リードするものの情熱と苦悩）、97年マナスル（因縁の山で結実した〝明治の登山〟）、01年ガッシャーブルムI峰・II峰（若き情熱で勝ち取った連続登頂）、02年ローツェ（通過点としてではなく）、03年アンナプルナI峰（巨大な呪縛の壁を越えて）と時系列で書き進められている。それぞれの登山の模様は隊員の著書からの引用やインタビューを交えながら、臨場感を盛り上げ、頂に到達するまでの隊員達の心の葛藤を余すところなく伝えている。

アンナプルナを除く章末には、平野真一氏による明大山岳部・炉辺会の海外登山についてのコラムが添付され、時代背景と山岳部のDNAを伝えてくれる。資料として巻末に「8000㍍峰登頂ルート」が添付されているが、14座の登攀ルート概念図と登頂記録で構成されており、コンパクトながら新たなルートや登山方法を創りだす一助となるものである。

明治大学のヒマラヤ登山は、もちろん日本山岳会のマナスル遠征にその端を発するが、原点は70年の植村直己さんのエヴェレスト登頂である。植村さんに続いた会員達はさまざまな登山隊に参加し、着実に腕を磨き、夢を蓄え多くの成果を獲得して母校に還っていった。その実力はその後のヒマラヤ登山で大いに発揮され、単一大学山岳部による8000㍍峰14座完登の原動力になっている。「夢の実現」後も、さらに若い世代や現役の学生も大きな「夢」を描きはじめたという。

事業の継続は、類まれなる牽引者の出現と新陳代謝によって実践されていく。「より困難な課題を求めて」情熱を燃やし続ける彼らにエールを送りたい。　**（重廣恒夫）**

『欣ちゃんの山一辺倒』

山森欣一・著

2005年7月
アテネ書房刊
四六判　375㌻
定価2500円

日本ヒマラヤ協会の中心人物としてヒマラヤ登山に活躍するとともに協会の発展に尽力し、還暦を迎えた今も同協会の理事長として手腕を振るう著者の半生記である。山笑う、山滴る、山粧う、山眠るの4章に大別されている。

「山笑う」では自分の生い立ちから、山行きに興味を抱いた動機、山嶺登高会への入会、美智子夫人との出会い、山嶺登高会10周年など山男として成長の過程が記され、なかでも唐沢岳幕岩を全国に知らしめた実績が熱く語られ興味深い。

「山滴る」は初めてのヒマラヤ、ハチンダール・キッシュやカンチェンジュンガ大縦走、白きヒマラヤに眠るで構成されている。社会人山岳会としては後発のヒマラヤ入りであるが、カシミールの盟主

ヌン登山から始まりネパール、パキスタンの高峰に登り、まだ外国登山隊に未公開だった中国やブータンの登山許可取得に精力的に活動した様子が伺える。

「山粧う」では、中国大陸への夢とナムナニ偵察、グレート・ベンドへの挑戦と悠久の流れ長江流域の旅、巨峰に挟まれたラプチェ・カン、桃源郷の旅、シャラ・リへの挑戦があり、いずれも中国側のヒマラヤと山旅が語られている。そのなかでチョー・オユーとシシャパンマの間で大きな山容を見せながら未踏峰であったラプチェ・カン（7367メートル）隊隊長としての初登頂成功は、ヒマラヤ登山貢献者の勲章と言えよう。

「山眠る」は、山仲間6人の在りし日の想い出をそれぞれの追悼集から引用している。

本書は随所に著者が関与した多数のヒマラヤ登山が記されており読者を飽きさせない。国内の山岳界内での意思疎通や協力体制作りに奔走し、ネパールなどの登山許可制度やわが国のヒマラヤ登山申請の複雑な手続きの改良など、自分一人の利益ではなく、登山界に貢献したこと。日本山岳会が実施した三国合同登山やナムチャバルワ登山許可取得では、水面下の政治的動きによって苦汁を呑まされたことなど、博識の著者が反骨精神を持って難事を強力に推進していく過程が鮮やかに描かれている。

日本ヒマラヤ協会の登山隊は国内合同隊と揶揄されながら、立派な実績を残してきた。そのリーダーたる著者の山森氏はヒマラヤニストから慕われ、貴重な情報を収集し、月刊会報『ヒマラヤ』などを通して広く発信し続けている。

（南井英弘）

『永遠の未踏峰』

渡部由輝・著

2005年8月
山と溪谷社刊
四六判　272ページ
定価1680円

著者は20代の知床から始まってヒマラヤ遠征まで、40年にわたって幅広く登山活動を続けてきた人である。

自分自身の登山、先人、あるいは内外の先鋭クライマーの登山スタイルと心の葛藤をめんめんと列挙しながら、登山の精神的側面―なぜ山に向かうのか―を解明しようとする。

身体的にも精神的にも極度に負担の大きい登山を「極限山行」と位置づけ、なぜそのような登山が行なわれるのか、ある種の登山家はなぜ、それをやめることができないのか、内外の第一線クライマーを「極限山行」に駆り立てるのは何なのかを、多くの事例を挙げつつ論考を進める（序章～第2章）。

また、登山の魔力、呪縛について考察し、単独行の精神性を重要視しつつ、登山者自身が「極限的な登攀」を続ける理由を明確には説明しきれないのではないか、と推論する（第3章）。

多くの悲劇的遭難の事実を挙げながら、クライマーは極限的登攀に熱中し、無償（多くは反社会的）の行為をなぜ続けるのかを論じたうえで「人はなぜ山に登るのか」について、著者自身の結論を導き出している。

しかし、これが正しい確定的な解答ではなく「近似解」（著者は数学の専門家である）としている。死を賭してまで求める「なぜ」の合理的解答はないのでは？という悩ましい結論だ。

そして、登山は「人間存在の根源的状況から派生する奥深い文化的事象」なのかもしれない、ということだけは本書で伝えられたと著者は自負する。

「百名山の登り方」のようなハウツー的な山の本があふれかえる昨今だが、形而上的状況を求めて山を目指す人たちも多いはずだ。

さまざまな事例を比較しながら登山の精神論をつきつめようとする本書は、久々に読み応えある著作である。

（松沢節夫）

ネパール・ヒマラヤ　アンナプルナ・ゴラパニ
シャクナゲとタトパニ温泉トレッキング
ベストシーズンのゴラパニ。ネパール国花のラリグラス
（石楠花）がぎっしりと、山がピンクに染まります。
3月19日(土)～3月28日(火) 10日間　￥268,000
Wec　株式会社ウェック・トレック
国土交通大臣登録旅行業1662号/日本旅行業協会正会員
〒105-0003 東京都港区西新橋3－24－8山内ビル4階
電話 03－3437－8848 E-MAIL info@everest.co.jp

会務報告

12月理事会

日時　12月14日　18時30分～20時15分

場所　日本山岳会会議室

［出席者］　平山会長、平林・橋本・田邊各副会長、吉永・贊田各常務理事、石田・篠崎・大蔵・野口・斎藤・藤井・渡邉・石橋各理事、山本監事、小倉・重廣・今村各常任評議員

［委任］　古野理事、一力監事

●議事に先立ち、平山会長より創立100周年という多忙な年であったが、役員各位の協力によって年末を迎えることができた。新しい年に向かって、引続きよろしくお願いしたいとの挨拶があった。

【審議事項】

1　創立100周年記念事業関連

(1)収入状況（17年11月末現在）

●9700万9704円（内募金6588万1229円）

(2)財務状況（17年11月末現在）

●総支出　4492万9631円

●12月繰越金5208万73円

(3)「百年史」配布方法について

百年史(委)の要望及び理事会・常務理事会・創立100周年記念事業委員会の審議経緯を踏まえ「百年史」を希望しない会員を除く全会員に無償で配布する。

2　今後の運営方針「新しい100年に向かって」について

平山会長より常務理事会に対し検討の指示があったため、先に山本監事より提出された会員減対策に対する提言を含め、常務理事会において特に短期的施策を中心とした方針をまとめ、1月理事会に提案する。　（承認）

3　定款改定について（理事定数）

理事＝現行15名以上20名以内→10名以上15名以内（ただし、評議員については、諮問機関としての機能に鑑み、現行の15名以上20名以内のままとする）

前記、2の「今後の運営方針」についての合意を得たうえ、2月あるいは3月理事会にて議決、評議員会の意見を聞き、平成18年度総会に提案（平成19年度施行）する手順で進める。　（承認）

4　名誉会員推薦規定の改定について

現行規定の候補を推薦できる者の範囲に不備が指摘されているため、理事会及び常任評議員による各々の改定案を作成、調整の上、評議員会において今年度中に審議・決定する。　（承認）

5　公益法人改革に伴う対応について

国の公益法人改革に伴い社団法人の非営利法人への移行が予定されるため、平成18年3月の提出が見込まれている改革法案内容判明時にプロジェクト・チームを設置し、「公益非営利法人」の認定を目指す。　（承認）

6　公益法人会計基準の改正に伴う対応について

平成18年度より減価償却の導入、費目の変更等を内容とする公益法人会計基準の改正が施行されるため、早急に財務委員及び有識者によるプロジェクト・チームを設置して対応する。　（承認）

7　104号室改装工事について

●工事費見積り　大成サービス㈱＝1029万円　創家建設工業㈱＝1155万円（他2社は辞退）

となったため、大成サービス㈱に消費税込み1千万円で請け負わせることとした。　（承認）

8　マナスル初登頂50周年記念事業について

日程を左記のように決定した。

①2月18日(土)「THEマナスル―過去から未来へ」（於・東京都体育館）

②5月7日～16日　記念トレッキング（マナスル関連4コース、会報1・2月号に広報し参加者を募集）

③5月9日　カトマンズ・記念レセプション（NMA主催）

④5月14日　本会主催レセプション（於・カトマンズ）

⑤9月24日～26日　日・ネ国国交樹立50周年記念ネパール展、レセプション参加（於・京王プラザホテル）

9　役員の出張経費について　（承認）

従来から不明確な点が指摘されていたため、今後、原則として左記のようにする。

①交通費（実費）及び宿泊費（1泊8000円）支給

②イベントに対する祝儀　一律1万円（ただし、補助金を支出している場合はなし）

③派遣人数　原則として1名（なお、支部等からの後援依頼に基づく場合は、当該支部等の負担によることをお願いする）

10　レスキュー協議会・山岳事故

調査への参加について
　11月理事会の審議に引続き、11月常務理事会において黒川指導委員長より経緯、内容等についての説明を受けたが、事故発生の把握と保険との関連等を明確にする必要があるため、本年度の参加は見送ることとした。ただし、公益性の観点から重要な事業でもあり、来年度当初において再検討する。

11　青年部の活動状況等について「同人きりぎりす」（会員番号13947、11月理事会における「日本山岳会青年部」として団体会員になっている旨の説明は誤りのため訂正）と、執行部の一員としての青年部の活動が混同されている実状が判明した。2月に予定している予算編成会議における今年度の事業報告、来年度の事業計画案を検討し、今後の対応を探ることとした。ただし、青年部発行による「きりぎりす」は、今後における継続的発行を前提とする。（承認）

12　事務の社会保険加入について
　麹町社会保険事務所より加入状況の問い合わせがあり、今後の公益非営利法人の認定にも影響することが懸念されるため、18年度からの加入を検討する。（承認）

13　名義後援
「さいたま文学館」＝企画展「秩父文学散歩」（4月29日〜7月30日）（承認）

14「山岳」転載許可
「独立行政法人　産業技術総合研究所」＝山岳第3年および22年の岩手山関連（承認）

【報告事項】

1　11月10日　創立100周年記念事業委員会（吉永）
　特に「百年史」の配布方法についての意見を聞いた。

2　11月12日　委員会・同好会代表者説明会（吉永）
　104号室の改装案についての意見・希望を聴取した。

3　11月19日　新入会員オリエンテーション（吉永）
　出席新入会員38名、会長・副会長の出席を得、本会の活動内容等の説明と意見交換を行なった。

4　11月29日　創立100周年記念事業反省・慰労会（吉永）
　記念式典・祝賀晩餐会を滞りなく終了、一段落したのを機に開催。

5　12月10日　北海道支部創立40周年記念祝賀会（平山会長）
　平山会長および平林副会長が出席、盛大に行なわれた。

6　11月新入会員　10名

マナスル登頂50周年記念イベント「THEマナスル——過去から未来へ」

　マナスル（8163m）初登頂は半世紀前の敗戦国に自信をみなぎらせた金字塔として、登山界ばかりでなく全国民に大きな影響を及ぼした。また、アジアを代表する記録としても誇らしいものとなっている。
　さて、2006年はマナスル登頂50周年にあたる。日本山岳会マナスル委員会では、記念イベントを開催し、これからのヒマラヤ登山を考え、ネパールなどの周辺諸国と親善友好を推進したいと考えている。
多数ご参加ください（参加無料）。
日　時：2月18日㈯
　　午後5時30分（開演）〜9時
場　所：東京体育館第1会議室
　　（JR千駄ヶ谷駅前）
内　容：マナスル初登頂の映像と新旧の登頂者によるパネルトークショー、特別記念トレッキングツアーの紹介、お楽しみ抽選会などを予定。
問合せは日本山岳会マナスル委員会まで
FAX 03-3261-4441

ルーム日誌 12月

1日　フォトビデオクラブ
2日　緑爽会
5日　総務委員会
6日　図書委員会
7日　自然保護委員会
8日　学生部
9日　ゆきわり会
12日　アルパインスキークラブ
13日　百年史委員会　二次会
14日　理事会
15日　科学委員会
17日　SUN燦会　ゆきわり会
19日　事業委員会
20日　常務理事会　インターネット小委員会
21日　三水会
22日　自然保護委員会
27日　00会

12月来室者名436名

■会員異動（12月）

物故
西本栄一（10778）05・7・31

退会
片山隆市（8775）
高橋邦臣（9041）
新井文男（10513）
田中太門（11810）　東海
池田忠子（14098）　北海道

Climbing & Medicine・52

雪崩と心肺蘇生

志賀尚子

雪山シーズンが到来しましたが、先日、立山連峰・浄土山の山頂下130m地点で1名が死亡する雪崩事故がありました。雪崩用電波探知機（ビーコン）を装着しており、約20分後に仲間によって掘り出されたものの、すでに呼吸停止しており、病院へ搬送されましたが死亡されました。死因は窒息と報道されました。

雪崩による死因は、ほとんどが窒息か外傷で、時間が経てば低体温という因子も加わります。窒息がもっとも多く、その場合、呼吸停止していた時間が、救命できるか、さらには後遺症なく回復するかどうかの決め手になります。救命されても、低酸素脳症のため植物状態になってしまう場合もあります。頚椎骨折のような致命的外傷を受けてしまった場合には救命は困難です。

雪崩に埋まっていた時間が長いほど死亡率は高くなるので、一刻も早く掘り出すことが必要です。スイスにおける638名の雪崩遭難者のデータでは、雪崩により完全に埋まった場合の生存率は、18分以内に救出された場合は91％ですが、その後は急激に低下し、35分後で34％、130分後で7％です（Bruggerら、2001年）。

救出までの時間に加えて、口・鼻の周囲に空間が残っていたかどうかも生死を分けるポイントになります。発見時、口や鼻に雪が入っていたら、雪崩発生直後に呼吸停止した可能性が高く、救命の可能性が低いと考えられます。

発見時、呼吸がなければただちに心肺蘇生法を始めます。遭難者が低体温症に陥っていると、呼吸や脈拍が遅くなり、血管が収縮して脈が触れにくくなります。そのような場合には呼吸を通常より長く（30〜45秒）観察し、蘇生法が必要かどうか判断します。

発見まで長時間経過してしまった場合には、救命の可能性は非常に低くなります。ただし、ほとんどの場合、低体温になっていますから、いわゆる仮死状態である可能性もあり、死亡の判定は慎重を期さなければなりません。深部体温（直腸温など）13℃で救命された例もあり、体温だけで死亡と判断することは困難です。温めて元の体温に戻しても、心拍が再開しないことを確認して、初めて死亡と診断することができます。致命的外傷を受けていたり、窒息後に長時間経過していることが明らかな場合を除いては、蘇生法を施行しながら至急病院へ搬送します。

現場で蘇生に成功した場合、保温しつつ外傷の有無を調べ、病院へ運びます。低体温症では心室細動（致命的不整脈）が誘発されやすいので、意識、呼吸、脈拍のチェックを続けつつ慎重に搬送します。

なお、基本中の基本ですが、事故の負傷者に蘇生法を行なう場合、第2の事故が起こらないよう現場の安全確認を忘れてはいけません。

図書受入報告（2005年12月）

著　者	書　名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈／購入別
大阪大学山岳会(編)	後立山からヒマラヤへ——戦後半世紀の歩み	204pp/21cm	大阪大学山岳会	2005	発行者寄贈
新居綱男(監修)尾野益大(編著)	剣山物語——頂上ヒュッテ50年の歩み	105pp/21cm	剣山頂上ヒュッテ	2005	編者寄贈
伊藤敞	森林訪問	183pp/19cm	石川書房	2005	著者寄贈
秩父宮雍仁親王	皇族に生まれて——秩父宮随筆集	248pp/22cm	渡辺出版	2005	出版社寄贈
中村吉広	チベット語になった「坊っちゃん」	285pp/20cm	山と溪谷社	2005	出版社寄贈
野中至・野中千代子	富士案内　芙蓉日記(平凡社ライブラリー)	254pp/16cm	平凡社	2005	出版社寄贈
寺田和雄	山億い都市想い——わがふるさと町田をめぐって	249pp/20cm	茗溪堂	2005	著者寄贈
内田陽一	五十歳からの挑戦——アルプス4000m峰36座登頂	264pp/22cm	東京新聞出版局	2005	出版社寄贈
城川隆生	丹沢の行者道を歩く	190pp/21cm	白山書房	2005	出版社寄贈
杉山末雄	須山のあれこれ	431pp/27cm	(財)須山振興会	2005	著者寄贈
Bart Jordans	Bhutan —— A Trekker's Guide	331pp/18cm	Cicerone	2005	著者寄贈
Kev Reynolds	100 Hut Walks in the Alps	246pp/18cm	Cicerone	2005	出版社寄贈
John Whelpton	A History of Nepal	296pp/24cm	Cambridge	2005	購入

INFORMATION

イラスト　宇都木慎一

◆100周年記念シンポジウムのお知らせ

記念フォーラム委員会

「日本山岳会のこれからを考える第2回」を開催。

日時　2月11日(土)14時～20時
場所　日本青年館501会議室（TEL 03-3401-0101）
内容　竹内洋岳・中村保各氏の講演と、若手パネリストによるディスカッションなど
定員　120名
申込・問合せは、河野史まで（FAX 048-256-8606　omkawano@dolphin.ocn.ne.jp）
＊詳細は11月号19ページ参照。

◆講演会「マッキンリーの気象」—新しくわかったこと—

科学委員会

16年間にわたり、大蔵喜福会員が中心となりマッキンリーの気象調査を実施。その総括と新しく解ったことを、話していただきます。

日時　2月16日(木)18時30分～20時
場所　山岳会集会室
講師　大蔵喜福会員
問合　宮津公一まで（TEL 03-5746-2344）

◆「熊野古道伊勢路と花の藤原岳を歩く」

事業委員会

熊野古道伊勢路と、花を愛でながら鈴鹿の藤原岳を登ります。

日程　3月31日(金)～4月4日(火)
定員　20名（定員に達し次第締切）
集合　3月31日(金)21時
解散　4月4日(火)21時頃
集合・解散とも新宿
交通　チャーターバス利用
費用　5万8000円（交通費、宿泊3泊、弁当、保険料、懇親会費他）
申込　植木淑美まで（〒195-0053　町田市能ヶ谷町1151-54　FAX 042-734-1498　yoshimi-210@smile.odn.ne.jp）
＊申込者には詳細を送ります。

◆映画「アルプスの山の娘」と講演の集い

緑爽会

「アルプスの山の娘（ハイヂ）」を鑑賞後、ヨーロッパアルプスに関する話を聞きます。

日時　2月16日(木)13時～16時
場所　山岳会集会室
講師　宮下啓三会員
会費　500円（茶菓を用意）
申込　葉書かFAXで左記まで（〒157-0061　世田谷区北烏山9-18-13　松本恒廣　TEL 03-3326-2892）

◆講演会のお知らせ　新土曜会

南極のベテラン、芳野赳夫会員に「日本の南極観測・探検の時代」を話していただきます。

日時　2月18日(土)15時～17時
場所　山岳会集会室
＊申し込み不要です。

◆第15回「山好きの山の絵展」

アルパインスケッチクラブ

会期　2月19日(日)～25日(土)10時～19時（初日は12時から、最終日は17時まで）
会場　東京交通会館2階ギャラリー（有楽町2-10-1　TEL 03-3215-7962）
＊入場無料です。

◆「3月春スキー」参加者募集

山想倶楽部

日程　3月19日(日)～21日(火)
集合　19日午前8時　新宿西口安田生命ビル前
解散　21日21時頃、集合場所と同宿泊　赤倉温泉・ユアーズイン
内容　プロによる各種オプション有り（有料）
費用　2万9000円（往復バス、現地移動、宿泊代を含む）
定員　25名（先着順）
申込　3月6日までに中川秀利まで（FAX 03-3990-3274　nakagawa@calls.ne.jp）
＊申込者には詳細を送ります。

❖編集後記❖

●新しい年を迎えました。今年もどうぞよろしくお願いいたします。
●今年は、マナスル初登頂50周年に当たります。その記念の年に、比較的若い会員にマナスルと現在の山への想いをリレーで綴ってもらおうと考えています。ご期待ください。

（神長幹雄）

日本山岳会会報　山　728号

2006年（平成18年）1月20日発行
発行所　社団法人日本山岳会
〒102－0081
東京都千代田区四番町5－4
サンビュウハイツ四番町
TEL　東京(03)3261－4433
FAX　東京(03)3261－4441
発行者　日本山岳会会長　平山善吉
編集人　神長幹雄
E-メール:jac-kaiho@jac.or.jp
印　刷　株式会社　双陽社